SHIMANE AKAHIGE BANK

島根の地域医療

2008／10／10　第 26 号

発行：島根県健康福祉部
医療対策課 医師確保対策室

今回の紙面

◆地域医療最前線 NO.31《岡田和悟 先生》　◆看護師さんのページ NO.11《大田美穂子さん》
◆研修医のページ NO.16《有藤円香 先生》　◆赤ひげ先生《下村龍一 先生》
◆医学生夏季地域医療実習《山口祐貴さん》　◆地域医療 in 隠岐の島《今井雅浩さん》
◆高校生医療現場体験セミナー　◆初期・後期臨床研修プログラムセミナー　◆その他

地域医療最前線 NO.31

大田市立病院　院長　岡田　和悟

昨年世界文化遺産に登録された「石見銀山」を有する大田市は、平成１７年１０月に旧大田市、邇摩郡仁摩町、温泉津町が合併して、新生大田市としてスタートしました。市内には、昨年から今年にかけて放映されたテレビドラマ「砂時計」のモチーフとなった仁摩サンドミュージアムや壮大な縄文杉が立ち木のまま展示されている小豆原埋没林や三瓶自然館があり、温泉津温泉・三瓶温泉を始めとする数カ所の温泉も湧出し、歴史・自然・文化に恵まれ全国からも注目されている地域です。

大田市立病院は、平成１１年２月に国立大田病院から委譲を受けて整備され、３３９床の急性期・療養型病院として島根県中央部の大田市と邑智郡さらにその周辺圏域の中核的な医療を担ってきました。平成１９年度診療実績では、１日当たり外来５９２．２人、入院２３１．３人の患者さんの診療を行っており、１日当たり救急車来院平均５台、年間の救急患者数１万４千人、年間分娩件数２６７件、手術件数２、２３５件の実績があります。利用可能な設備機器としては、平成１９年３月より電子カルテを導入しており、６４ｃｈのヘリカルＣＴやＭＲＩなどの画像診断も電子カルテ上で即座に参照できる体制になっています。また院内活動としてリスクマネージメント部会、感染対策チーム(ＩＣＴ)、栄養サポートチーム（ＮＳＴ）、褥瘡対策チーム、緩和ケアなどが活発に活動しています。

医療従事者の確保については、あいにくと近年の地方における医師・看護師不足の影響は免れ得ず、大学からの医師派遣の減少や各医師個人の開業・転出などから医師数の減少が目立ち３０名を切る状態となり、本年７月からは産婦人科は１人体制となり、出産取り扱い制限を実施しており、内科系・外科系の２名当直体制の維持が困難になりつつあります。

看護師についても新規採用数の減少や産休・育休の増加から、一部の病棟休止も継続している状態です。当圏域は、県内でも最も高齢化が進んでおり、循環器疾患や骨運動器疾患などを中心に多くの医療需要があります。また圏域での殆どの出産を担当する使命を課せられている当病院にとっては、現状はまさに土俵際でなんとか踏ん張っている状態です。これらの対策として、昨年度より医師・看護師の待遇改善、市立病院内に医療対策課の設置、看護学生に対する修学資金制度の設立、２４時間対応の院内保育所設置準備（年内開設予定）、医師事務作業補助（医療クラーク）の配置など様々な対策を行っていますが、未だ十分な確保には至っていません。圏域の救急医療体制に関しては、大田市医師会との間で大田市救急体制検討部会を開催し、医療機能分担について協議を継続しています。今後の課題としては、平成２０年度より開始された新島根県保健医療計画においても大田二次医療圏における中核病院としての４疾患５事業をはじめとして各方面における中心的な役割が期待されており、圏域における急性期、回復期医療を担う中核病院としての役割が求められています。また８年後に迫った新病院建設も視野に入ってきています。

このように当地区の地域医療の最前線では、現在在籍している医

師を始めとする医療従事者がなんとか踏ん張っているものの、地域医療の継続のためには早急に応援部隊、すなわち「お助け人（ＷＯＭＡＮ、ＭＡＮ問わず）」を求めています。医師の診療科別では、産婦人科及び循環器科・消化器科をはじめとする内科医師が早急に必要とされています。大田市に縁のある方々や興味を持たれている方で応援部隊になっていただける方は、大田市立病院医療対策課までご連絡ください。

看護師さんのページ

NO.11

公立邑智病院

看護師　大田　美穂子

私は現在外来看護部に配属されています（５年）。外科外来、手術室、小児科などを経験し、今は透析室を中心に月３回から５回の救急当直も受け持っています。今回記事を依頼され何を書こうかと考えましたが、外来の接遇係もやっていることから、昨年度、外来患者さんを対象に行った接遇アンケートについて感じたことをご紹介したいと思います。

質問内容は、身だしなみ、表情、態度、言葉遣い、あいさつ、説明、雰囲気、待ち時間の８項目、２０問で、そのほか自由解答欄を設けたものでした。

最初は、どんな評価を受けるのかと不安でしたが、ほとんどの項目で『できている』という評価をいただきました。自由解答欄からも『対応してくれるときの表情が、生き生きとしてすごくよい』、『高齢の方に対して、やわらかい地元の言葉を使っているので、ほのぼのする』、『医師も看護師も皆温かく、泪が出そうです』など、たくさんのうれしい言葉をいただきました。

しかし、課題も見つかりました。それは、「待ち時間に配慮しているか？」の質問に対し、「出来ている」と回答した方が、全体の５３％だったことです。指摘内容としては、『待ち時間が長い時、あと何分とか何番目とか教えてほしい』などでした。待ち時間の対応については配慮しているつもりだっただけにショックでした。しかし、めげてばかりはいられません。このあとさっそく、診察や検査の進行状況の表示、番号札の運営及び予約票をより分かりやすく表示する。また予約診察の遅れのアナウンス、声掛けなど、看護部で話し合い、これまでよりも細やかに行うようにしました。待たされる方には、待つ理由が要ります。なぜこの時間待たなければいけないのか、納得のいく説明や対応をしていきたいと思います。

最後になりましたが、私はこれまで接遇係の活動として、敬語の正しい使い方や電話応対などの学習会を繰り返してきました。しかし、ただ正しい言葉遣いをすることが接遇なのかということに当然ながら違和感を持つようになりました。接遇とはコミュニケーションであり、ある意味究極の自己表現だと思います。その意味でも、このアンケートは自己を見つめ直す、とてもよいきっかけになりました。これからもそれぞれが、自己を見つめた上で患者さんが何を感じ、何を求め、何を必要としているかを考えていきたいと思います。

研修医のページ

NO.16

島根県立中央病院

２年目研修医　有藤　円香

研修が始まってから早いもので１年半が経とうとしています。今まで多くの患者さんの診療にあたり、また多くの先生方に指導していただき、とても充実した研修をしております。

私は、出雲で生まれ育ち、大学でいったん離れたものの再度この地に戻ってまいりました。理由は、出雲（実家）でゆとりをもって医療に従事したかったからです。

救命部門の充実など当院の研修プログラムには魅力があります。その中に、地域医療研修の一環として隠岐（隠岐病院または島前病院）で１ヶ月間の研修があります。私は５月に島前病院で研修させていただきました。在宅医療、介護保険制度など、地域のニーズに合わせた医療・福祉を経験することができました。患者自身はもちろんのこと、その家族の生活背景にまで注意し、退院後の患者さんの状態も把握することなど、医師としての基本姿勢を問いただすよい機会となりました。それと同時に、医師としてのやりがいを再認識し、この職業を選択してよかったと思いました。

私は、女性の医師として、今後、結婚・出産・育児などに直面した時、色々と思い悩むと思います。当院では、院内保育所設置を提案され、働く女性としては今後さらにサービスの充実を願っていますが、現実は厳しいものと考えています。しかし、以前ある先生が、女性医師に対して「女性にとって医師

免許というのは、最も素晴らしく、価値があり、また有利な資格の一つです。非難やプレッシャーに負けず、生涯、医師を続けてください。」と言われたのを私は一生忘れません。出産、育児を経て、母として家庭を守りながらも、医師として妥協することなく働いておられる先生方と出会い、尊敬するとともに、医師とは続ける価値のある職業と感じました。私も、いつかその先生の言葉を実感できるよう、医師を続けていきたいと思います。

赤ひげ先生

益田赤十字病院
検査部副部長　下村　龍一

8月1日付けで、益田赤十字病院に赴任いたしました。検査副部長という肩書きをいただいておりますが、臨床検査専門医としてのトレーニングは受けておりません。あくまで病理専門医ですが、今後は検査部のマネージメントにも尽力したいと思っております。

私は大阪市出身で、医師としては1３年目です。学生時代、出身大学の病院病理部の業務内容に興味をもったことが、病理に進むきっかけでした。臨床研修を含め、卒後８年間は関西の複数の病院に勤務しました。この間、一貫して現場の病理診断（外科病理）のトレーニングを意識的に行ってきました。ここ６年ほどは、藤田保健衛生大学（愛知県）の病理学教室でお世話になっていました。大学では、診断業務以外に、研究や教育にも関わることができ、貴重な経験を積むことができました。同時に、病理診断に重点を置いて仕事をしたいという気持ちも強くなりました。

最近は、臨床研修の必修化に伴い、出身大学とは地理的、人事的に無関係の研修指定病院を目指す研修医が少なくないと思います。私の卒業時点では、大学の特定の医局（教室）へ入局し、出身大学の附属病院、または関連の研修指定病院で研修する医師が多数派でした。私の場合、出身大学とは無関係の研修指定病院だったため、指導医や周りの研修医はまったく見ず知らずの状態でした。よくも悪くも、このときの経験を通じて、別転地へ参入することに抵抗がなくなりました。諸先輩方の忠告をあまり聞かない（？）まま、自分に足りない技術や知識を、その時点で最も効率よく吸収できそうな医療機関を渡り歩く結果となりました。

島根県を選択したのは、前任地にあまり固執しなかった結果でもあります。出身地を含め、瀬戸内や太平洋側の勤務地が多かったためか、一度日本海側に居住してみたいという潜在意識があったかもしれません。島根県以外に、問い合わせや見学を行った病院も、日本海側が多かったように思います。島根県の病院見学の際は、医療対策課の皆さんに完全にお任せして、西から東へ移動するスケジュールを組んでいただきました。２日間の日程でしたが、県内の病院関係者、病理医と効率よく接することができ、今回の異動にあたって、大きな転機となったことは間違いありません。

本年度より医療法が見直され、病理診断科が標榜科に加わることになりました。病理診断に関連した診療報酬が上方修正されるなど、病理診断が一定の評価を受けていることは、歓迎すべき変化です。しかし、（社）日本病理学会が認定する病理専門医は、全国でわずか２，０００人程度です。その多くが大都市圏の大病院に集中しており、地方の一般病院における病理医の不足は明らかです。私個人の力はごく限られていますが、地域医療に立脚した病理診断のあり方を模索していきたいと考えております。

高校生医療現場体験セミナー

県内高校生を対象に医療現場での体験、学習を通し、医師の仕事や地域医療についての理解を深め、医師を目指そうとする高校生を増やすことを目的に「高校生医療現場体験セミナー」を、平成１８年度から年２回（夏季・春季）実施しております。今年度第１回目となる本セミナーは、８月５日、８日に３病院（松江赤十字病院、浜田医療センター、隠岐病院）のご協力の下、１２校３４名の参加を得て開催しました。

参加した生徒たちは、普段経験することのできない医療現場での体験や、研修医との懇談等を大変熱心に受講し、活発な意見交換を行っていました。開催後に実施したアンケートでは「医学部に進学しようという気持が強くなった」「医師になって島根県に貢献したい」「生まれ育った地元のために頑張りたい」など、島根の地域医療にとって大変頼もしい感想を多くいただきました。

【医療対策課　石原】

医療現場体験セミナーに参加して

安来高校２年生　杉原　太郎

今回の研修を経験して、かなり多くのことを学ぶことが出来ました。まず、

私はあまり大きな病院へ行ったことがないので研修前はとても不安でした。でも、他の高校の人達がたくさんいたので、「みんな医師を目指しているのか」と自分にとって大変刺激になりました。

また、研修医の先生とお話しすることが出来て大学についてのことや、勉強のことについて聞けてよかったです。

研修の最後に、実際に医療の現場に立たれている医師の方のお話しを聞いて、本当に心に響きました。お話しを聞いてもっと頑張ろうと思いました。勉強は苦手ですが、医師になりたいという気持ちが強ければ苦手な勉強も、もっと頑張れると思います。

貴重な体験を本当にありがとうございました。

医学生夏季地域医療実習

島前地区での実習を終えて

島根大学医学部
医学科３年　山口　祐貴

私は夏季地域医療実習で、隠岐島前地区の実習に参加させていただきました。１年の春休みには春季地域医療実習で島後地区に行かせていただき、本土との連携の大変さや医師が不足していることがよくわかったのですが、島前は入院病床が島後よりさらに少ないと知り、島後以上に様々な苦労があるのではないか、また３つの島の連携はどうなっているのか知りたい、と思ったのが応募した動機でした。

しかし、実際に島前地区へ行き、医師や看護師、作業療法士の方々の話を聞かせていただいたり、訪問看護やリハビリに同行させていただいたところ、島前病院のみなさんは離島医療の問題点がどうこうということよりも、とにかく「地域に密着した、患者さん、地域の方の求める医療サービスの実現」のために努力をされているのだ、ということがよくわかりました。

特に衝撃をうけたことが２つあり、どちらも初めて聞き、目にしたことなのですが、その１つは訪問リハビリです。今まで、リハビリ＝病院でするもの、と思っていたので、退院後は通院してもらうのだと当たり前のように考えていました。しかし、通院が困難な方もいらっしゃいますし、実際に自宅での生活をはじめてみなければわからない不便さもあります。作業療法士の方はお一人しかいらっしゃらないので、退院した時よりももっと良くするということはなかなか難しいけれど、少しでも生活する上での支障が軽減するようにと訪問リハビリで患者さんのお宅をまわっておられるということでした。

印象深かったことの２つ目は、サービス調整会議です。この会議は、主治医、看護師、作業療法士という病院内の医療スタッフだけでなく、ケアマネージャー、ヘルパー、デイサービスのスタッフ、と、在宅ケアに関わる全てのスタッフが集まり、患者さん一人ひとりについて在宅ケアを行うに当たって気になる点や改善すべき点など、食事やトイレのことから介護者のことまで、しっかりと話し合うものです。これまでに参加させていただいた実習でも、ノートなどで看護師とヘルパー間の連携をとるなど、紙面上のやりとりは拝見させていただいたことがありましたが、全てのスタッフが一堂に会して話し合うというのははじめてでした。サービス調整会議がある、と聞いたときは衝撃を受け、参加させていただくのがとても待ち遠しかったです。この会議で、また、個別の患者さんの担当者のみで集まる担当者会議でも、リハビリや看護職員、ヘルパーさんの訪問を一人ひとりの状況に併せて実施しておられることを知り、また、あくまでも患者さんに「してあげる」という姿勢ではなく、なにか不安なことや困ったことがあれば、患者さんの方から言ってもらえるような関係作りをする、頼られたときにすぐ対応できるよう、予想される問題に対する解決法は準備

隠岐島前病院で研修を受ける様子

しておく、という方針が感じられ、こんなにしっかりした体制の下であれば、患者さんや地域の方は安心して頼れるだろうな、と思いました。

私は自分が医師になる、という実感がまだまだ強くない状態ですが、今回の実習で、理想の医師像、目指す地域医療の形に新たな項目が増えました。地域医療実習に参加させていただくと、毎回、驚きや感動、課題などたくさんのことを得ることができ、地域医療について考えることができ感謝しています。これからも島根県内の多くの地域で、その地域ならではの地域医療にふれさせていただけたらと思っています。

初期・後期臨床研修プログラムセミナー

臨床研修病院の研修プログラムが医学生や研修医にとってより魅力的となることを目的として、平成２０年７月１９日に島根大学医学部において７回目の「初期・後期臨床研修プログラムセミナー」を開催しました。各病院の担当者等７６名の方に参加いただきました。

講師に香川大学医学部附属病院の石田俊彦病院長をお招きし、「香川大学医学部附属病院における卒後臨床研修制度のとらえ方―奇跡的Ｖ字回復の影にあるものは何か？―」と題してご講演をいただき、その後、参加者と意見交換しました。Ｈ１６年度からの初期臨床研修制度をきっかけにＨ１５年度４０名だった研修医がＨ１６年度２５名、Ｈ１７年度１７名、Ｈ１８年度１０名と減少していったため、その減少理由をつきつめ、対策をとられた結果、Ｈ１９年度３１名、Ｈ２０年度４０名とまさにＶ字回復を実現された秘策をお聞きしました。主な秘策として、①プログラムの単純化と選択コースの設置、②学生・研修医の意見の取り入れ、③指導医の意識改革（研修医のために何ができるか？）・教育手当の支給、④センター専任講師の配置を挙げられました。

【医療対策課　太田】

地域医療・h隠岐の島 BLS講習会＋ウルトラマラソン

島根大学医学部　今井　雅浩

島根大学医学部の学生にとって「島根大学医学部で学ぶ」ということはどう意味を持つのだろうか？　単に医師免許、看護師免許を取得するだけなら、島根大学でなくても「医学部で学ぶ」だけで十分である。しかし、好むと好まざるとにかかわらず人生における貴重な数年間を過ごす場所として島根を選択したわけだから、「島根大学医学部で学ぶ」ということに、「医学部で学ぶ」とは違う何か付与しなければ、島根に来た意味がない。

島根で過ごす数年かに有意義な意義を付与するための一つの方法は、学生自らが地域に足を運び、地域と交流することだと思う。その地域交流にも幾つもの方法があるが、地域から学生が多くを学び、学生が地域へ何かを還元する双方向性の交流は、一つのあるべき姿だと思う。

今回は医学生が地域に還元する方法として、学生主催のＢＬＳ講習会を取り上げた。本学には、全国の学生を対象としたＢＬＳ・ＡＣＬＳ講習会を主催している学生が多数いる。嬉しいことに、その学生の多くが、島根県内でＢＬＳ講習会を実施して救急蘇生を広めたい、少しでも島根に還元したいと思ってくれていたためである。

地域交流の場としては、第３回隠岐の島ウルトラマラソンを選び、総勢２０名で参加した。学生たちは、ＢＬＳ講習会を通して大学で学んだ知識・経験を地域住民に伝え、ウルトラマラソンを通して、隠岐の温かい、熱い思いに触れることができた。地域〈＝〉学生の双方向性の交流を実現した。ちなみに、ウルトラマラソンには５０kmと１００kmの部があり、１２名が５０kmの部に参加し、全員が完走した。また、８名はボランティアスタッフとして参加した。

学生が「島根大学医学部で学ぶ」という意義を、自分なりに創りあげる一つの機会として、今回のような双方向性の交流が、数多く実現されると良いと思う。そして、いつの日か「島根大学医学部で学ぶ」ことの意義を、「学生自らが地域に足を運ぶことにより、自分自身で創りあげることが当たり前」になるような文化が島根大学医学部に広がることを切に願う。

今後、隠岐の島以外でもＢＬＳ講習会を通した双方向性の地域交流を実施したいと思っている。

『赤ひげバンク』の登録者のみなさんへ

住所等に変更があった場合は、メールでお知らせいただくと助かります。

島根県医療対策課
医師確保対策室の連絡先
〒690-8501 松江市殿町1番地
E-mail:iryou@pref.shimane.lg.jp
TEL:0852-22-6684
FAX:0852-22-6040
ホームページ[島根の医療]
http://www.pref.shimane.lg.jp/iryotaisaku/

携帯からの問い合わせはこちら

島根の地域医療視察ツアー参加者募集

島根県では、将来県内で勤務を考えておられる医師やそのご家族を対象に地域医療の視察ツアーを開催しています。自然を余すことなく満喫できる島根の地で、実際にその目で町の雰囲気や病院、診療所を見てください。

日程や視察コースは、ご希望に沿いながら話し合いで決めていきますので、お気軽にご連絡ください。

○対　象

◆将来島根県での勤務を考えておられる県外の医師及びそのご家族。

○ツアーの費用

◆県の規程に基づき、原則２泊３日分（２名分）の旅費を県が負担します。

○申込方法など

◆参加希望の方は、お気軽に医療対策課医師確保対策室までご連絡ください。

※E メールでの申し込みは島根県ホームページに「参加申請書」を載せていますので、ご利用ください。

http://www.pref.shimane.lg.jp/iryotaisaku/

島根県は医師を求めています

“お医者さんを紹介してください”

島根県では、県内で勤務していただける医師を求めています。全国どこへでも専任の医師が出張し、電話やメールでは相談しにくい、細やかな相談にも応じます。

お気軽に医師確保対策室までご連絡ください。

また、友人・知人に島根県での勤務を希望される医師がおられましたら、同意を得た上でご紹介ください。

ご紹介いただいた医師へは、医療機関の情報等を提供し、県内への就業を支援します。

個人情報は、島根県個人情報保護条例に基づき適正に管理するとともに、目的以外の利用はいたしません。

今後のイベントスケジュール

▼平成２０年度地域医療教育連絡会

１０月３日から１１月６日まで県内６ヶ所（安来市、雲南市、大田市浜田市、益田市、隠岐の島町）の各会場において開催。

▼島根県臨床研修指導医講習会

日　時：平成２０年１１月２２日（土）１２時から
　　２４日（月）１３時まで
場　所：島根大学医学部看護学科棟

▼若手医師ステップアップ研修及び意見交換会

日　時：平成２０年１２月１３日（土）
場　所：ウェルシティー島根（出雲市塩冶有原町）
講　師：筑波大学臨床研修部　　前野　哲博 先生
テーマ：「研修医が抱える精神的ストレスについて」

※講演終了後、整形外科の実習及び意見交換を行う予定です。
多数のご参加をお待ちしております。

SHIMANE AKAHIGE BANK

赤ひげ先生

医師募集キャラクター